



Botswana Medical Information



2019年6月

【2019年6月報道記事抜粋】

●看護師の職場の安全確保を求めて

昨年4月エクステンション2のクリニックにて、勤務中に女性看護師がレイプされた事件が発生した後、政府は安全確保のため、CCTVの設置や看護師の通勤のための移動手段を改善すると約束したが、進展はなかった。14日金曜日早朝には、ブロードハースト3クリニックに7名の強盗が侵入し、看護師と患者の携帯電話が盗まれた。看護師労働組合は看護師の夜間の勤務中の安全を確保しなければ、勤務を行わないと訴えた。(17日モニター紙)
(注:保健省は19日フェイスブックにて、24時間の診療を行っているクリニックに対して、ファーエイ CCTV カメラの設置を開始し、既存のセキュリティに加えボツワナ警察の定期的なパトロールを開始したとのアナウンスあり。)

●ファーストレディが UNAIDS 特別大使となる・行動変容が重要

非感染性疾患(NCDs)の予防とHIVとAIDSの国家戦略枠組みの開始にあたり、ファーストレディが若者のエンパワメントのためのUNAIDS特別大使となることが発表された。大統領夫人は記者会見にて、過去の努力にもかかわらず、早い性デビュー、ティーンエージの妊娠、複数のパートナー、世代間の性が、HIV/AIDSとの戦いを困難にしていると述べた。
(17日デイリーニュース)
(注:当国のHIV/AIDS新規感染者層は、思春期女性から成人女性の年代の感染率が同年代男性に比べ高いことが問題となっている。)

●レムピュ中等学校で発生した謎の病について

3月に集団ヒステリーが発生したレムピュ中等学校について、先週実施された会議にて、生徒の親達は、状況がコントロールされていないため、生徒を転校させることを初等教育省の大臣へ要望した。

病に冒された生徒達は改善する予兆をみせず、目が見えず、しびれがあり、歩行が正常でない子供もおり、親達は今後障害が残るのではないかと心配している。ある生徒はすでに症状が4回出現している。

大臣は、生徒の転校や通学手段について検討すると返答した。学校にいても怖がる必要はなく、子供を安心させるよう、親に伝えた。政府は引き続き医師やカウンセラーを派遣し、心理的社会的なサポートを続ける。また、学校の寮を改善し、生徒達の生活環境を改善すると述べた。

教育担当局長は、6月よりふたたび生徒達が集団ヒステリーに襲われている旨の報告を受け、現在141名が学校を休んでいると述べた。

医師は、この病気を説明することは難しく、生徒達の住んでいる環境により、不安や転換性の障害が、体の反応を引き起こしていると述べた。現在原因調査を行っているが、同じ環境にいる生徒達の間でも影響を受けている生徒といない生徒がおり、影響を受けている多くは女生徒であると述べた。(17日デイリーニュース)

● プリンセスマリーナ病院にて専門性の高い治療を実施予定

6月24日から30日にかけてプリンセスマリーナ病院にて専門性の高い2疾患の治療キャンペーンが行われる。1つは、腎透析アクセスキャンペーンであり、血液透析を必要とする20名の患者がシャント手術を受ける予定。手術はマリーナ病院の医師と南アフリカのサンングヒル病院の医師で行う。2つめは、循環器キャンペーンであり、56人の患者が心臓の検査や治療を受ける。20件の血管造影検査、3件の冠動脈ステント留置術、31件の心臓エコー、2件のペースメーカー留置を予定している。(25日デイリーニュース)

● 2018/2019年のマラリアシーズンにて232件のマラリアが発生

WHOによると、2018/2019年10月から5月のシーズンに232件のマラリアが報告された。(28日ボツワナガーディアン)

(注：2017/2018年シーズンは約370件、2016/2017シーズンは約1600件。発生数は降雨量にも影響されるが、今シーズンの降雨は少ない。)

● インターナショナルメディカルグループとの医療パートナーシップ

モザンビークで開催された米国・アフリカサミットにて、ボツワナは国際的な医療プロバイダーであるインターナショナルメディカルグループ(ヨーロッパのGruppo San Donato)とのパートナーシップを模索している。同社はマシレ教育病院にて小児がん分野の提携を検討している。(22-28日 ウィークエンドポスト)

文責：高原 野草(在ボツワナ日本大使館医務官)